



きみだけのいろ

～みんなちがうから みんないい～



文：粕谷 勇輔 絵：多田 野乃

あるところに まいごになった いちわの アナツバメが いました。

なまえは パブロ。

パブロは とてもよわきて いつも おかあさんと いっしょに いました。

しかし いまは ひとりぼっち。 おかあさんと はぐれてしまったのです。

パブロは どうしたらよいかわからず こまって いました。



すると　そこへ　よんわの　ツバメたちが　やってきました。
かれらは　パブロを　みつけると　ふしぎそうなかおをして
ちかづいてきました。



「みないかおだな。おまえ なまえは？」

と いちわの ツバメが パブロに きいてきました。

「パブロ…。きみたちは だれ??」

と パブロは おそろおそろ ききかえしました。

「おれは ロック。こっちは ライトで うしろにいるのが
ふたごの リリーと メリーだ。」

「おまえは どこから きたんだ？」

と ロックは ふたたび パブロに ききます。



「マレーシア…。」

と パブロが いうと

「マレーシア？ どこだろう。」

と ライトは くびを かしげました。

「…ここは どこ？」

と パブロが ちいさなこえて きくと

「ここは にほんよ。」

と こんどは リリーが おしえてくれました。



「にほん！？どこだろう・・・」

なんてことでしょう。

パブロは いつのまにか

知らないところまで とんできていたのです。



ロックたちの しつもんは まだまだ とまりません。

「ぼくたちと からだのいろも おおきさも ちがうけど

すの つくりかたも ちがうの？」

「えっと ぼくたちは だえきて つくっているよ。」

「ええー！？」

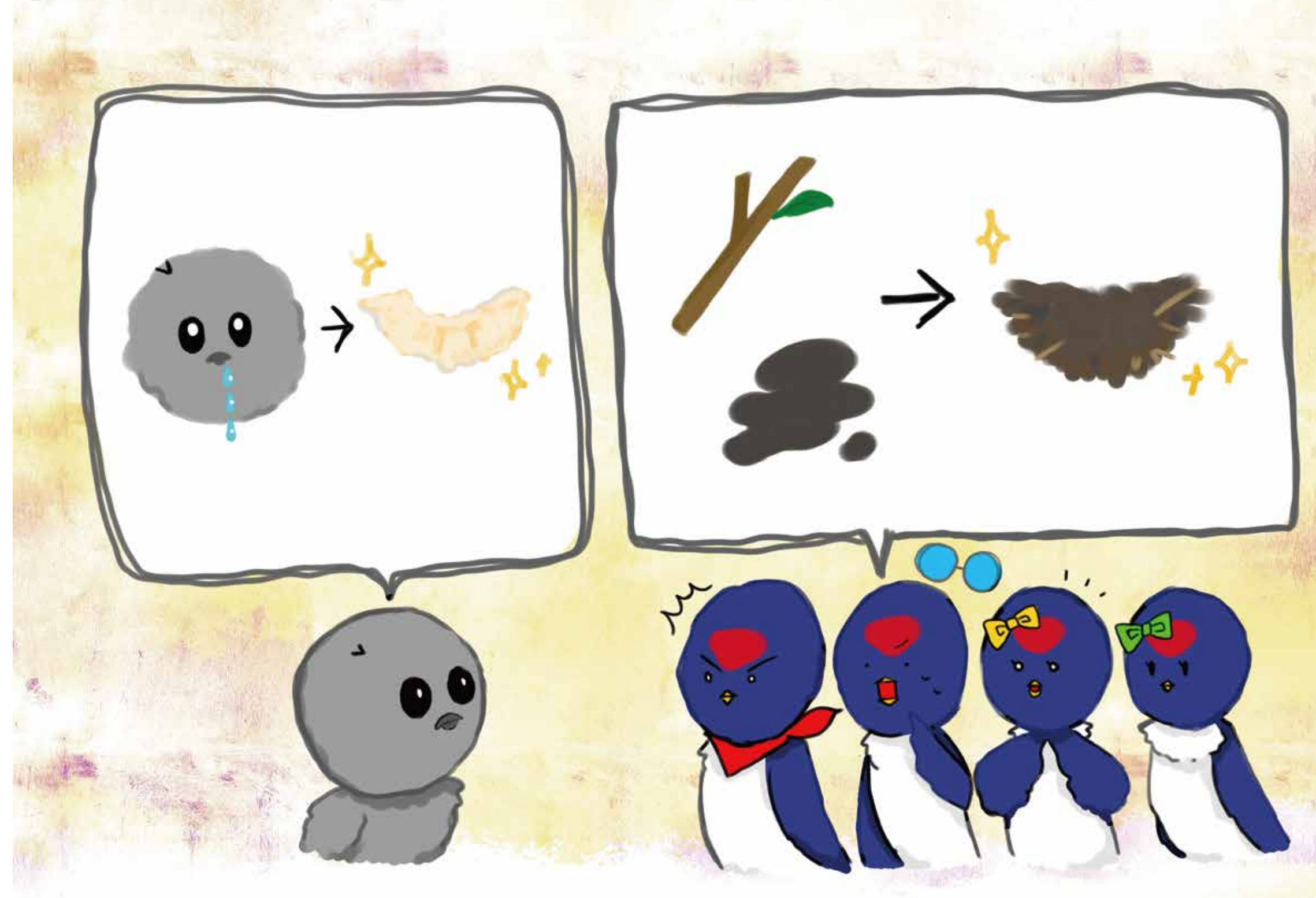
ロックたちは めを まんまるにして おどろきました。

パブロは それが ふつうのことだと おもっていたので

なぜ おどろかれたのか わかりませんでした。

「にほんでは きのえだや どろをかさねて すをつくるんだよ。」

と ライトが おしえてくれました。



（ぼくだけ ちがうんだ…）

と パブロは こころのなかで つぶやきました。

「ちなみに にほんでは にんげんのおうちや

えきのホームにすを つくるんだけど マレーシアでは どこにつくるの？」

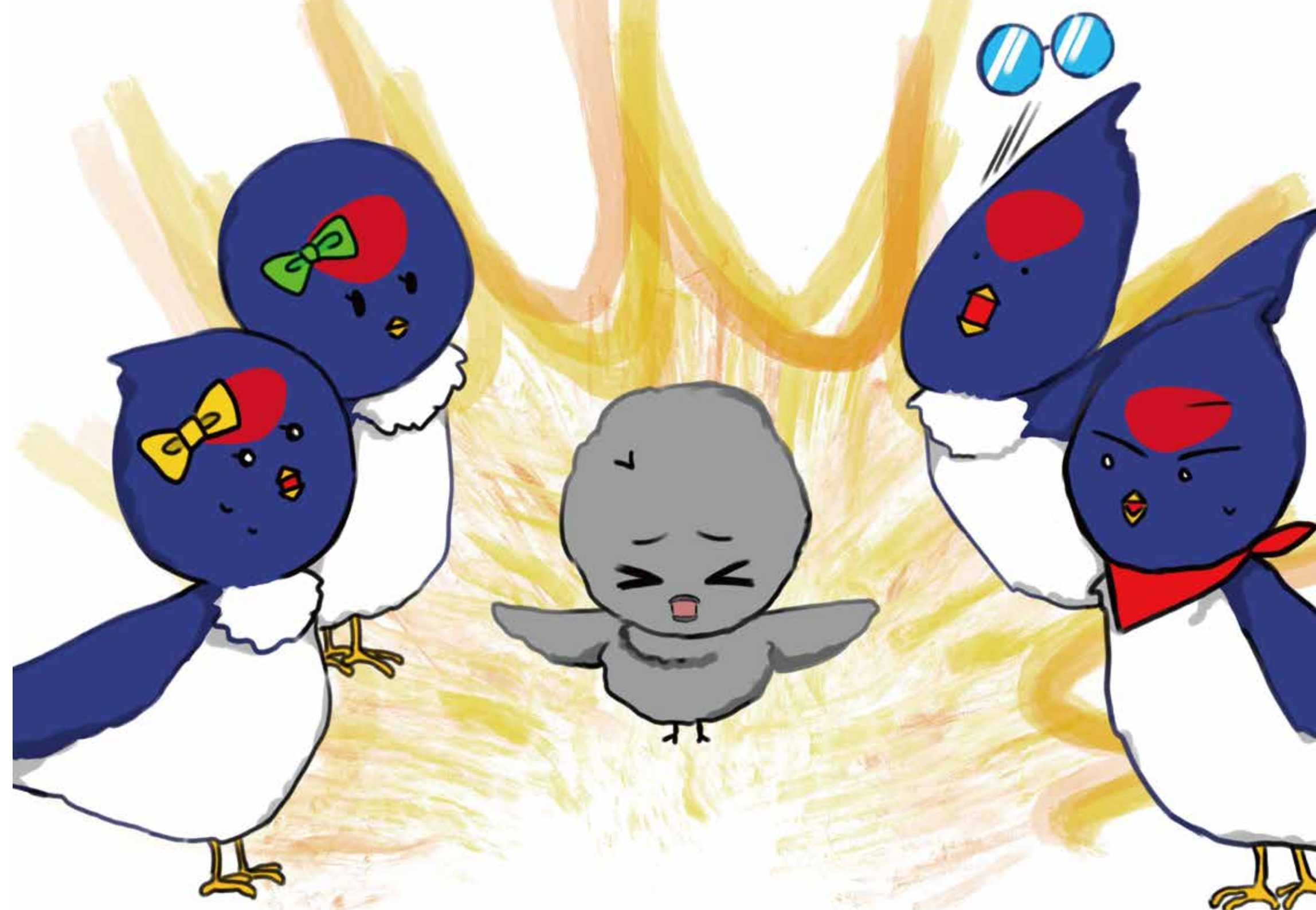
と メリーが ききました。

パブロは きかれたことに こたえようとしますが、なぜか こえが でません。

（みんなと ちがうことが こわい。）

（どうして ぼくだけ みんなと ちがうんだろう。）

（こわい…こわい…）



「ごめん！」

パブロは　そう言って　とんで　にげて　しまいました。

けっして　ふりかえることなく、なきながら　とびつづけました。





よるになって あたりが まっくらに なったころ、
パブロは こうじげんばの すみっこで やすんで いました。
すると そこで ペンキを みつけました。



（ぼくだけ みんなと ちがうんだ。）

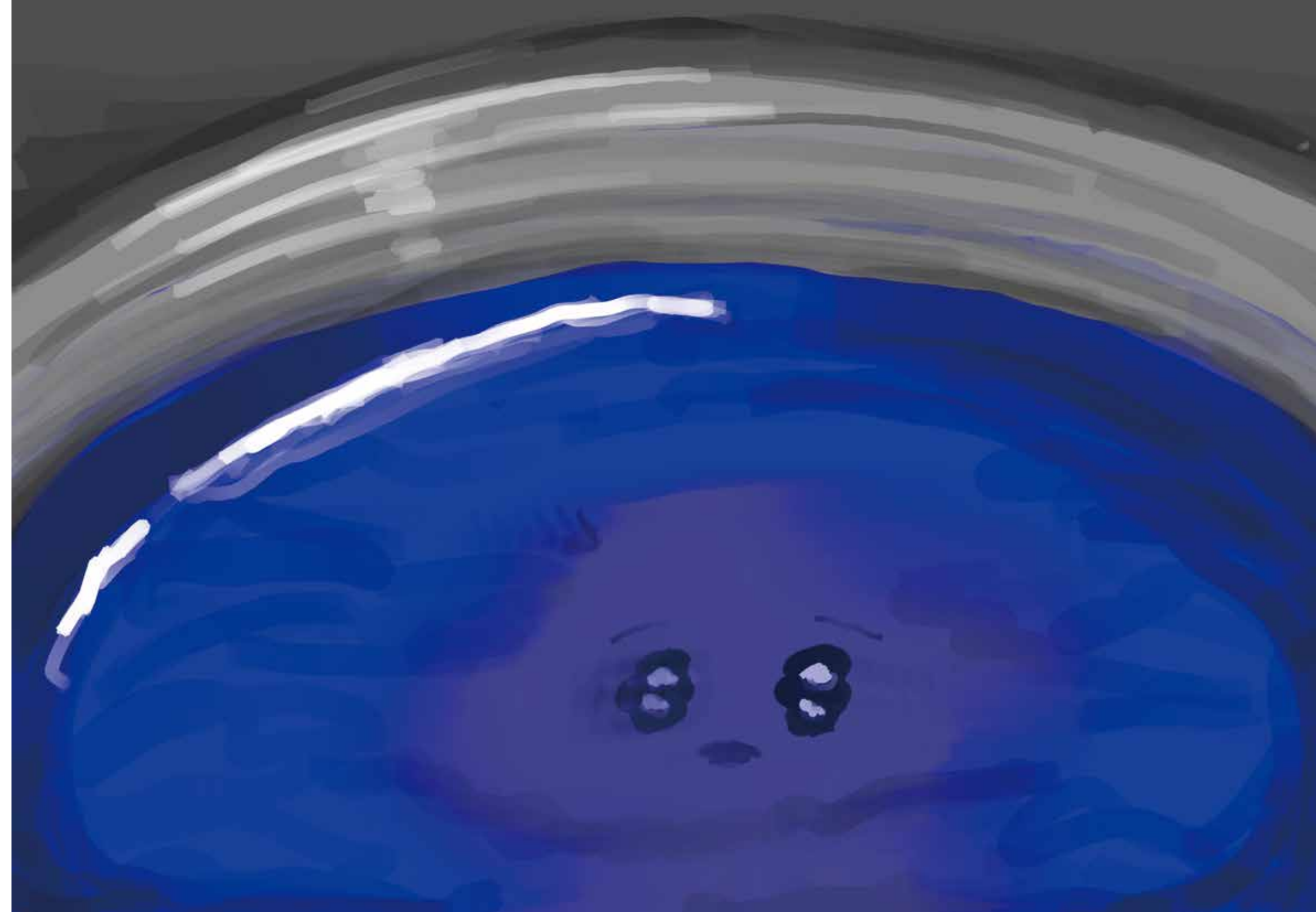
（せめて みためだけでも にほんの

ツバメたちと おなじに なれば いいのかな。）

（そうだ、きっとそうだ…!）

そうやって じぶんを いいきかせて、からだに

ペンキを ぬろうとした そのとき、



「そんなところで なにを しているんだい？」

と とつぜん うえの ほうから こえが しました。

うえを みあげると、そこには おおきなとりが いました。



「あなたは だれ？」

「わたしかい？わたしは ジョーンズ。」

「せかいじゅうを たびする わたりどりさ。」

「きみは なんのために ペンキを もっているんだい？」

「このペンキを めって、にほんの ツバメたちと おなじ

すがたに なろうと おもったんだ。」

「どうして そんなことを するんだい？」

と ジョーンズが きくと、パブロは ちいさな こえて こたえました。



「ぼくは ほんの ツバメたちより 小さいし、からだの いろも
すを つくる ばしょも、つくりかたも、みんなと ちがうんだ。」

「ぼくだけ、みんなと ちがうんだ…」

そうって、パブロは なきだして しまいました。

ジョーンズは それをきいて こういいました。

「それは きみが まだ このせかいを
ほんの すこししか しらない からだよ。」

「…すこし？」

「ああ、そうさ。」





「わたしは せかいじゅうを たびして、たくさんの どうぶつたちを
みてきたんだ。この せかいには きみよりも ちいさな
どうぶつも いるし、ながい しっぽを もった どうぶつや
そらを とばない どうぶつだって いるんだよ。」

「そうなの？」

「そうさ。」

ジョーンズは バブロに たくさんの どうぶつのことを
おしえて くれました。

「きみの そのからだも、すをつくる ばしょや つくりかたも、なににも
おかしくなんて ないし、かえる ひつようだって ないんだよ。」

「このせかいには いろいろな どうぶつがいて、みんながみんな ちがうんだ。」

「そのちがいのことを “こせい” っていうんだよ。」

「こせいは きみにしか だせない きみだけのいる みたいなものさ。」

「こせい？ ぼくだけのいる？」

「そう。みんなちがって みんないい、みんなちがうから みんないいんだよ。」

「ぼくは おかしくない？」

「ああ、おかしくなんて ないとも。」

「みんな ちがうからこそ、みんなて たすけあって、きょうりよくしあって
いきていけば いいんだよ。」

「だから どうどうと していなさい。きみにしかない いろだ、だいに
しなさい。」



「わかった、ありがとう ジョーンズさん。」

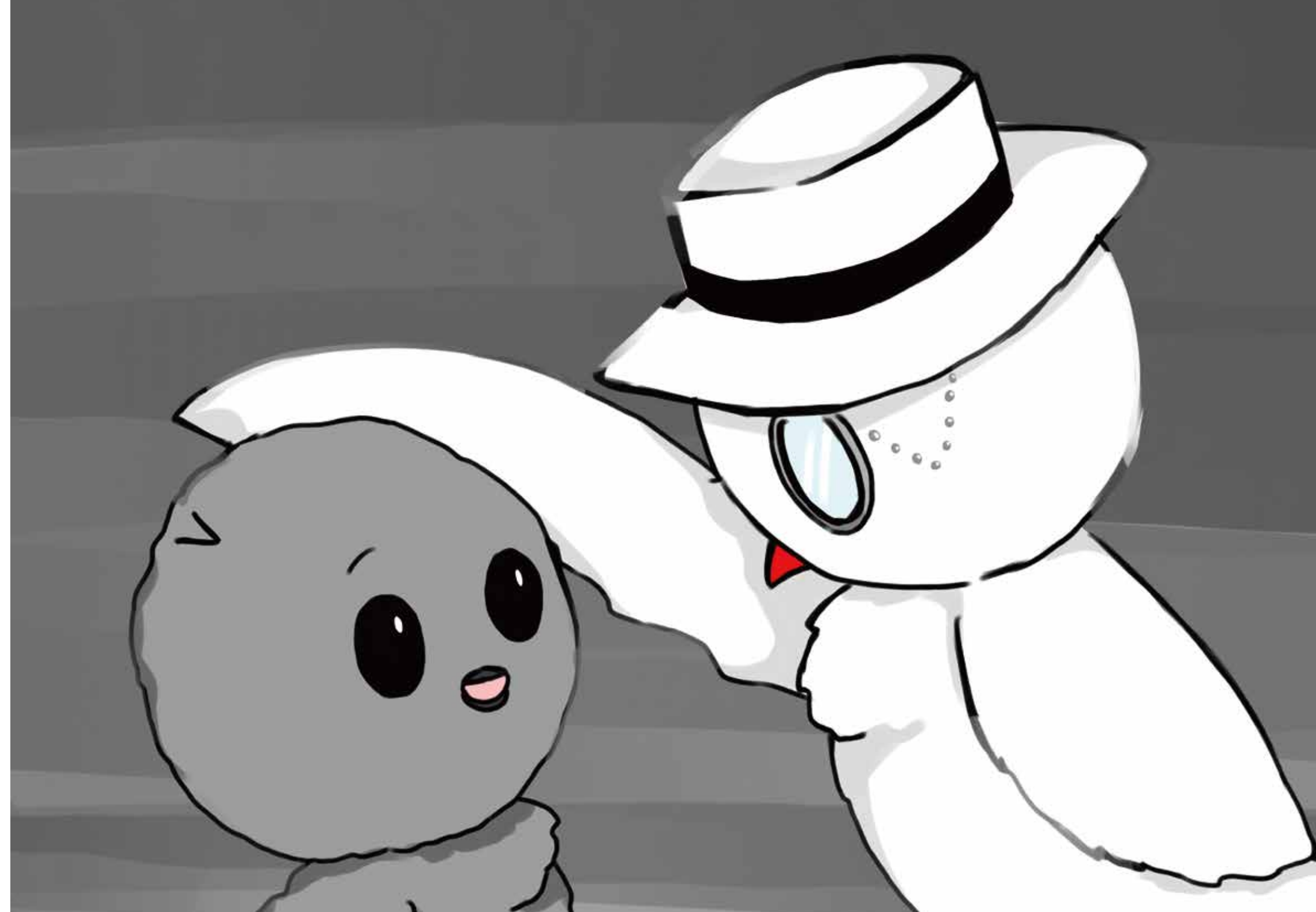
「どういたしまして。」

ジョーンズは パブロに マレーシアへの かえりかたを

おしえたあと、パブロの あたまを やさしく なてました。そして

「では、わたしは もういくね。」

と いった とびたって いました。





みんながうから、みんないい。

ほくも このままで いいんだ。

ほくには ほくのよさ、ほくにはしかない ほくだけのいるが あるんだ。

パブロは うまれてはじめて、じぶんに じしんが つきました。

そして つぎのひ...

パブロは ジョーンズの すかたが みえなく なるまで

ずっと そらを ながめて いました。

パブロは ロックたちの ところへ いきました。

「きのうは とつぜん にげだしちゃって ごめんね。」

「きにしないで、わたしたちも きゅうに たくさん きいちゃって ごめんね。

あなたのことを 知りたかっただけなの。」

「よかったら またこんど にほんを あんないするよ！」

「うん、でもいいの？」

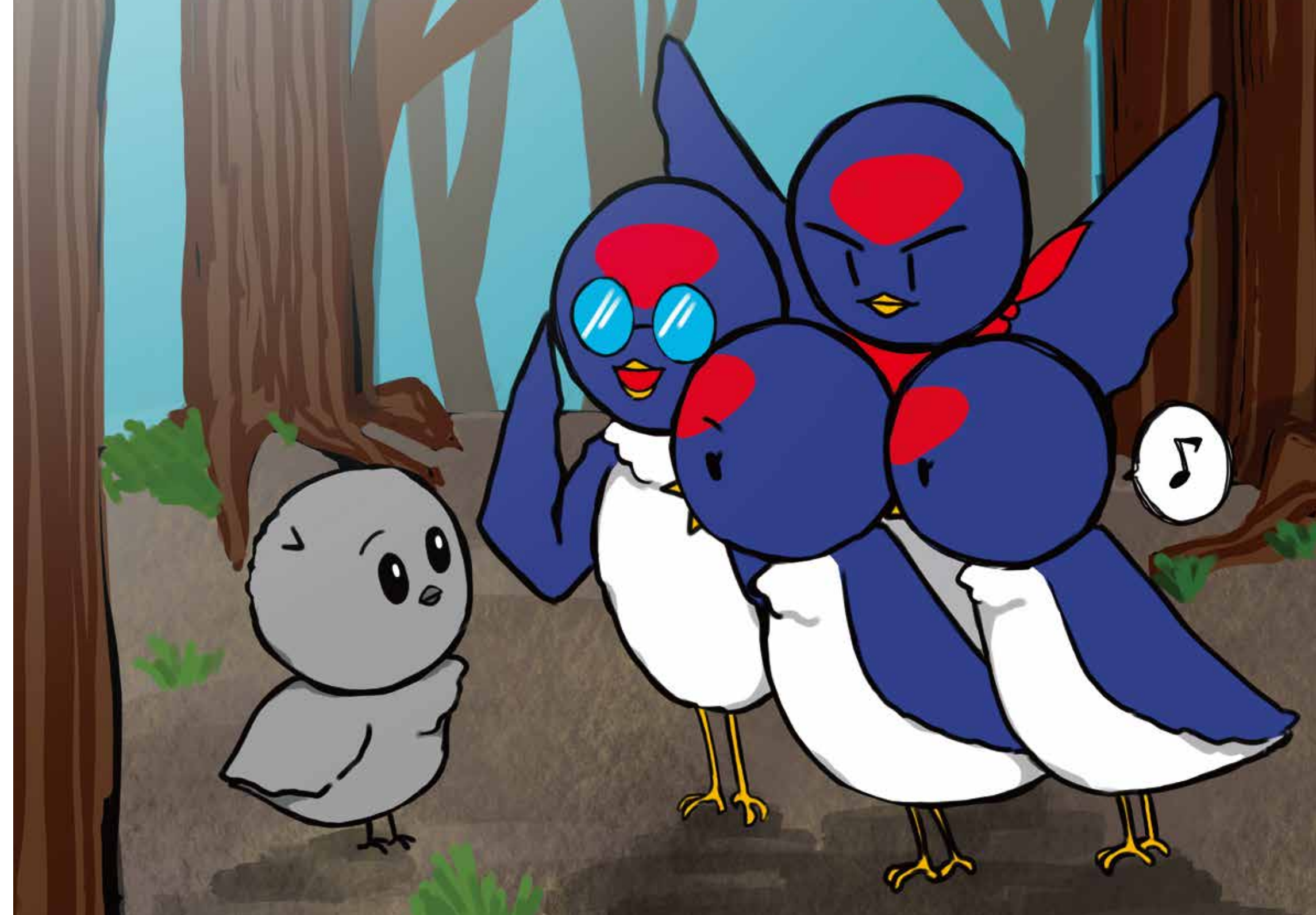
「あたりまえだろ。おれたち みんな ともだちだ。なあみんな！」

「うん！！！」

みんな違うから みんないい。

みんなちがうから、たりないところを おぎないあって、ささえあっていけばいい。

そのひ、パブロは ロックたちと、ともだちに なることが できました。



つぎのひ、パブロは ロックたちに みおくられて マレーシアへと
かえっていきました。

『また ぜったい あおうな！』

そうって ロックたちは パブロのすがたが みえなくなるまで
てを ふりつづけました。



マレーシアに つくと、そこには パブロのともだち、そして おかあさんが
待っていました。

「どこにいたの？ずっと さがして いたのよ。」

そうって おかあさんは パブロを だきしめました。

「にほんという くにに まよいこんじゃったんだ。」

パブロは にほんで たいけんしたことを みんなに はなしました。

そして マレーシアの ツバメたちも にほんの ツバメたちとの ちがいを
しることが できました。

また、そのちがいは おかしいことでは ないことも しることが できました。



「ぼくも ジョーンズさんみたいに せかいを たびしたい。」
「いろいろなものを みて まなんで、マレーシアの みんなに
おしえて あげたい。」
と パブロは おかあさんに いいました。
「すてきな ゆめね。」
おかあさんは そういって パブロの あたまを なでるのでした。
パブロの ぼうけんは まだまだ つづきそうです。

おしまい



Your own color
~ Every one is different
every one is special ~



ここに読んだ
感想を書いて
@sdgs_ehon_project
をつけてInstagramの
ストーリーに載せてみよう！
パブコから返信がくるよ！

